



でん しょう こ でん
伝承や古典にのこる!

に ほん
日本の
こわ よう かい
怖い妖怪

さと よう かい
里の妖怪たち

かん しゅう こ まつ かず ひこ さく え なか やま
監修/小松 和彦 作・絵/中山 けーしょー

ほるぷ出版

もくじ

かん とう げん 巻頭言／小松和彦先生	04
あお あん どん 青行燈	06
あお によう ぼう 青女房	07
あか なめ 垢嘗	08
あぶら あか こ 油赤子	09
い つ ま で 以津真天	10
おお く び 大首	11
おお く も 大蜘蛛	12
おさ かべ 長壁	13
おに 鬼	14
は ぐろ お歯黒べったり	16
おん も ら き 陰摩羅鬼	17
か しゃ 火車	18
かね だま 金霊	19
か ん ば り にゆう どう 加牟波理入道	20
きゅう そ 旧鼠	21
くだん 件	22
け う け げん 毛羽毛現	23
け じょう ろう 毛倡妓	24
さか ばしら 逆柱	25
さ しき わらし 座敷童子	26
さん もと ご ろう ざ え もん 山本五郎左衛門	28
しゅ ばん 朱の盤	29
しょうけら	30
じょうろうぐも 絡新婦	31
しろ うねり 白溶裔	32
じん めん そう 人面瘡	33

そう げん び 叢原火	34
たか おんな 高女	35
ちよう ちん こ ぞう 提灯小僧	36
ちよう ちん び 提灯火	37
つく も がみ 付喪神	38
つる べ お 釣瓶落とし	40
てん じょう なめ 天井嘗	41
どろ た ぼう 泥田坊	42
ぬらりひょん	43
ねこ また 猫又	44
ね ぶとり 寝肥	46
のっぺらぼう	47
はく ぞう す 白蔵主	48
ひ けし ばば 火消婆	49
ひょうすべ	50
びん ぼう がみ 貧乏神	51
ふた うち おんな 二口女	52
ぶる ぶる 震々	53
ほね おんな 骨女	54
まくら がえ 枕返し	55
もく もく れん 目目連	56
や なり 家鳴	57
ろく ろ く び 轆轤首	58
しょう かい で 妖怪たちが出てくる古典文学	60
さくいん	62
コラム／妖怪に形をあたえた絵師・鳥山石燕	53

妖怪は里にいる

夜道を歩いていると、何かがついてきている気がする……。
誰もいないはずのとなりの部屋から音が聞こえる……。

はっきりとは見えない、でも確かに感じるその違和感を、
むかしの人々は「妖怪」という形で残してきた。

そんな妖怪にまつわる伝承や、絵として残された姿を、
奇をてらわずに紹介していきたい。

この巻に集めたのは里にすむ、または里で出会う妖怪たち。
そう、今でもきつと町のなかに隠れている、
不思議な彼らの姿を見ていこう。

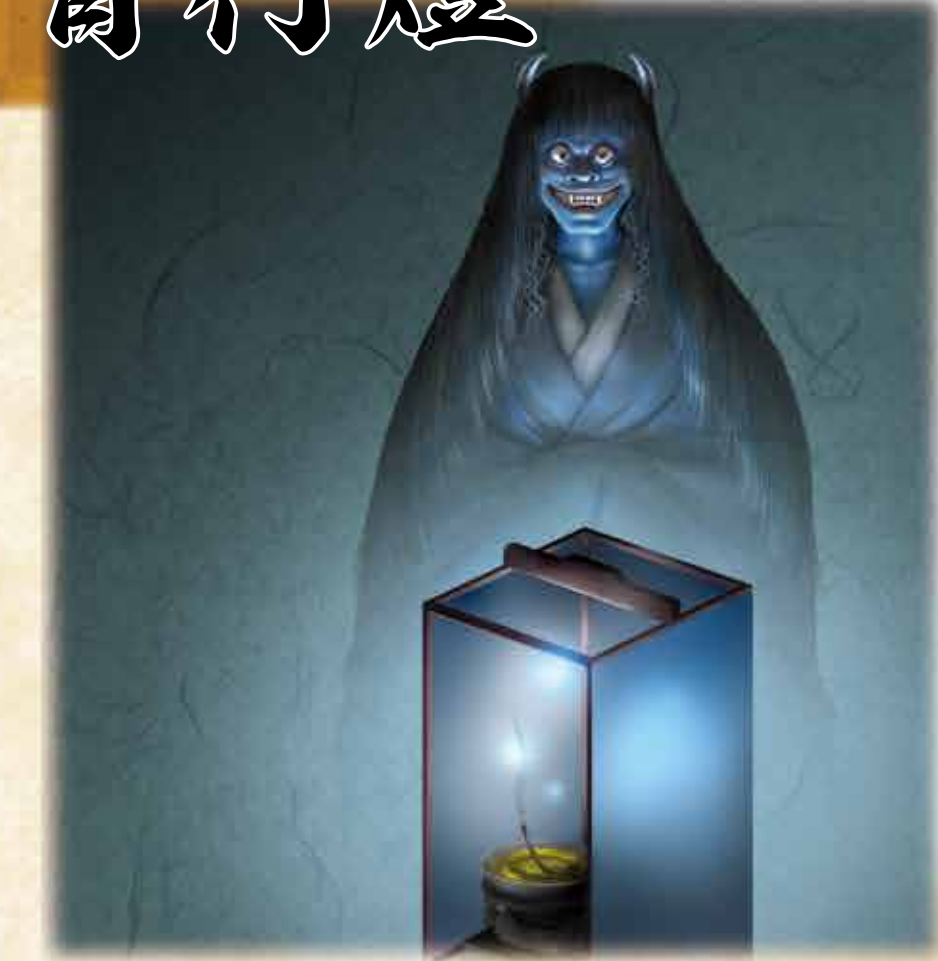


ひゃっせ や こう え ませ ごくさいにほんぶんかげんめいしゅう
▲「百鬼夜行絵巻」国際日本文化研究センター所蔵(部分)

ココに登場

本書の「ココに登場！」コーナーは、民間伝承や原典を参考にしながら、現代語で簡潔にまとめたものです。
また、本文中の参照表記で③は別巻「水辺と道の妖怪たち」、④は「山の妖怪たち」をあらわしています。

青行燈



家に出る妖怪

時代

江戸時代

出典

今昔百鬼拾遺
宿直草

出現場所

特定不能



特徴

百物語がおわると現れる。

江戸時代に流行った「百物語」は夏に怪談を楽しむスタイルのひとつだった。

新月の夜に百本の灯心をそなえた行燈か、ろうそくを百本用意して、行燈には青い紙を貼っておく。青色の着物で百物語に参加した人たちは、自分の知っている怪談をひとつ話しおえたら灯りをひとつずつ消

していき、そして、百話目の怪談をおえて最後の灯りを消すと……妖怪・青行燈が現れるといわれていた。

本当に青行燈が出ると困るので、多くの人は九十九話目で怪談をやめたようだ。実際に青行燈の姿を見た人は少なかっただろう。

ココに登場! 「宿直草」より

血気盛んな若者たちが集まり、百物語を試してみようということになった。各々が持ち寄った話が続けていると、いつの間にか九十九話になっている。さあ、いよいよだと若者たちが円く座って順に酒を注いでいると、「ここにもひとつ」という声と共に天井から大きな手が伸びてきた。腕に覚えのある若者が切りつけてみたが、三寸ほどの蜘蛛の足先が落ちてきただけだった。

鳥山石燕「今昔百鬼拾遺 青行燈」国立国会図書館デジタルコレクションより▶



青女房

御所に出る妖怪

時代

鎌倉時代

出典

吾妻鏡
今昔画図続百鬼

出現場所

京都、鎌倉近辺



特徴

いつも化粧をしている。



荒れはてた古い御所(皇族が住む館)で、いつも化粧をしている女官姿の妖怪が青女房……鎌倉幕府がつくった歴史書「吾妻鏡」にも登場する古い妖怪だ。

鏡や扇をもった姿で描かれることが多いが、見た目以外の特徴や能力はほとんどわかっていない。

一説によれば罪をおかした女官が山に逃げこんで

妖怪になったといわれている。

歯を黒く染め、おしろいで顔を白く塗りつぶした女官が、古い御所で誰かがくるのをじっと待っている……。なんとも、じわじわと怖さを感じる妖怪だ。

ココに登場! 「吾妻鏡」より

将軍・源実朝が丑の刻に南の庭を見ると、真っ暗な、静まりかえった庭を青女が走り抜けた。実朝が呼び止めたが、青女は答えることなく、門の外に出ると松明のような光を残して消えた。不審に思った実朝が陰陽師・安倍親職を呼び寄せて説明をすると、親職は「特に恐ろしいことではない」と実朝を安心させた後、南の庭で祈禱を行った。だがその翌日の丑の刻、鎌倉が大地震に襲われたとの記録が残っている。



▲「吾妻鏡」
しんぶんがく
人文学オープンデータ共同利用センター

大蜘蛛



時代

江戸時代

出典

狗張子

曾呂利物語

出現場所

長野県

京都府



特徴

歳をとった蜘蛛が妖怪になる。

家に出る妖怪

長壁



時代

安土桃山時代

出典

甲子夜話

老嫗茶話

出現場所

姫路城の

天守閣



特徴

姫路城に隠れ住む、妖怪の姫。

城に出る妖怪

大きな蜘蛛が苦手な人は多いだろう。10cmぐらいの蜘蛛でもじゅうぶん怖いが、京都の五条烏丸に出た大蜘蛛は2尺8寸(約84cm)もあったという。

見た目のよく似た妖怪・土蜘蛛(→④・p33)とはちがい、長い間生きた蜘蛛が妖怪・大蜘蛛になるといわれている。

老婆に化けたり、姿を消して人にとりついたりするという大蜘蛛だが、山伏や侍に斬り殺される伝説も多く、見た目ほどは強くないようだ。

ただ、古くから日本の怪談や随筆などにも登場しており、知名度は高かったと思われる。

ココに登場! 「曾呂利物語 足高蜘蛛の変化の事」より

ある山里で夕方、男が大きな栗の木の前を通ると、髪を振り乱した老婆が気味悪く笑いかけてきた。男は驚いて家に帰るが、恐ろしい姿の老婆は、男の家に入ってきてしまう。なんとか老婆を斬り捨てた男だったが、そのまま気絶してしまった。騒ぎを聞いて集まった人々に介抱された男が目覚めると家の中に老婆の姿はなく、ただ大きな蜘蛛の足が落ちていたという。

最大で30cmにもなる世界最大の蜘蛛「ルブロンオオツチグモ」▶



ココに登場! 「老嫗茶話」より

森田図書という小姓が天守閣の七階まで登れるかどうかの賭けをしたときに長壁姫に会った。神々しいほど気品に満ちた長壁姫は書物を読んでいたが、図書の姿を見ると「お前は何をしにきたのか」と問うた。

図書が正直に「肝試しにきました」と言うと、長壁姫は図書が肝試しを成し遂げた証拠になるよう、兜の鉦をくれたという。

※鉦…兜の左右と後ろで首を守る部分。

その正体についても、年老いた狐だという説や、天皇が愛した女性の霊だという説、姫路城が建っている姫山の神だという説などがあるようだ。

800匹の手下を操り、人の心を自由に読める長壁。その顔を見た者は即、命を失うそうだから、長壁に出会ったら足下だけを見ろといいだろう。



▲長壁がいるとされる姫路城天守



時代

な ら じ だ い い ぜん
奈良時代以前から

出典

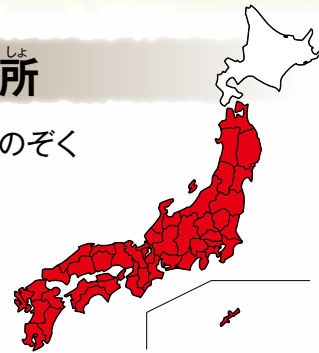
に ほん しよ き う じ しやう い もの がたり
日本書紀、宇治拾遺物語
こん じやく もの がたりしやう い せ もの がたり に ほん しよう かい い ぶん ろく
今昔物語集、伊勢物語、日本妖怪異聞録

特徴

おそ 恐ろしいものの代表として古くから伝わる。力が強く、武器をもって人を襲うこともある。

出現場所

ほつ かい どう
北海道をのぞく
に ほん ぜん こく
日本全国



てん ぐ (→ ㊤・p38) や河童 (→ ㊤・p26) となら
で、日本三大妖怪とされる鬼。桃太郎や、こぶとり
じいさんなどのむかし話にも登場する、おなじみの
妖怪だ。

からだ きょ だい あたま いっ ほん に ほん うし
体は巨大で、頭には一本か二本の牛のツノが生え



▲節分やねぶた祭りなど、
鬼は日常生活の色々なシーンに今でも登場している。
Footage supplied by shihina/123RF.COM

ている。髪
毛は縮れ毛。
口には牙、手
足の爪は鋭く
尖っていて、虎
の毛皮の腰巻
を巻いた姿で、
多くの浮世絵

や本に登場する。

せつ ぶん まめ お
節分の豆まきで追いはられれたり、桃太郎に退
治されたりする鬼だが、秋田県の三吉鬼は山から人
里にふらりと降りてきて酒屋でお酒を飲んでいくと
いう変わった鬼。代金を請求すると暴れるが、だ
まって帰してやると夜中に代金の十倍ぐらいの値
打ちの薪を置いていくそう。人間をたすけたやさ
しい鬼の話もあり、強く怖いだけではないのが鬼
の魅力だといえる。

ぶつ きやう おし じ ごく えん ま だい おう て づだ
仏教の教えでは、地獄で閻魔大王の手伝いをし
ている赤、青、黄、緑、黒の五色の鬼がいるという。

ちなみに鬼がよくもっている金棒は赤鬼専用の
武器とのことだ。

ココに登場

「伊勢物語 第六段 芥川」より

ある男が何年も女の元に通い続けたが、身分の違いでなかなか結婚できずにいた。あると
き、ついに二人は駆け落ちをするが、逃げる途中で夜になり雷雨にも見舞われる。男は荒れた
蔵を見つけて女を中に入れ、自分は弓矢を手を夜明けを待ち続けた。やがて夜が明け、男は蔵
の中を見たが、女の姿はどこにもなかった。女は蔵に住んでいた鬼に一口で食べられてしま
い、その時に叫んだ悲鳴は雷鳴にかき消されて男に聞こえなかったのだ。男はじだんだ踏んで
悲しがったが、どうすることもできなかった。

とりやませきえん こんじやくDやせしやうい おにDとくち
鳥山石燕「今昔百鬼拾遺 鬼一口」
国立国会図書館デジタルコレクションより▶



はぐろ 歯黒べったり

さと
里に出る
よう
妖怪

じ だい
時代

え ど じ だい
江戸時代

しゅつ てん
出典

え ほん ひやくもの がたり
絵本百物語
とう ほう かい だん たび
東北怪談の旅

しゅつ げん ば しょ
出現場所

とう ほう ち ほう
東北地方

とく ちょう
特徴

め はな おお くち
目と鼻はなく大きな口をしている。

おん も ら き 陰摩羅鬼

てら
寺に出る
よう
妖怪

じ だい
時代

せい き ごろ ちゅうごく そう
11世紀頃 中国(宋)

しゅつ てん
出典

せい せん ろく たい へい ひやくもの がたり
清尊録、太平百物語
こん じゃく が す そく ひやく き
今昔画図続百鬼

しゅつ げん ば しょ
出現場所

きょう と ふ
京都府

とく ちょう
特徴

し たい う くる かい ちょう
死体から生まれる黒い怪鳥。

のっぺらぼうの一種ともされる、目も鼻もない女の妖怪。

江戸時代の後期に出版された「絵本百物語」には、ある人が古い社の前を通りかかったとき、美しそうな女性がうつむいてお祈りをしていた。面白がって声をかけると、その女が目も鼻もない顔でふりむい

て、大きな口でけらけらと笑った。二度と見たくないほど恐ろしかった、と記されている。

お歯黒べったりは、狸や狐が化けているという説や、結婚直前に死んだ娘の亡霊が妖怪になったという説がある。人をおどろかすだけで、命まではとらないようだ。

陰摩羅鬼……名前がむずかしいのは中国から伝わった妖怪だからで、陰魔羅鬼とも書く。

鶴のような姿をしていて、色は黒く、目は灯火のように輝いている。羽をふるわせて、大きな声で鳴く。「新しい死体の気」が変化して現れるといわれている。

死体を埋葬しないでほうっておくと現れる妖怪・以津真天(→p10)に、少し似ているかもしれない。

チベットでは死体を鳥に食べさせる「鳥葬」という葬式の方法がある。鳥が死者の魂を天に運ぶイメージが、妖怪・陰摩羅鬼や以津真天を生みだしたのだろうか。

ココに登場! やまだ の り お とう ほう かい だん たび じゃんがら ねんぶつ より
山田野理夫「東北怪談の旅 じゃんがら念仏」より

浜通り地方の平の町はじゃんがら念仏踊りがさかんだった。その踊りの輪の中にひとときわ踊りの上手い若い女がいた。手ぬぐいをかぶっていたので顔は分からないが、派手な着物をきていて姿かたちが美しかった。踊りが終わって三人の若者が女に声をかけ、一緒に過ごした。別れ際に女が手ぬぐいを取って顔を見せると、口だけがあるのっぺらぼうで、歯にはお歯黒が塗られていた。



▲今も残るじゃんがら念仏踊り(福島県)

ココに登場! たい へい ひやくもの がたり より
「太平百物語」より

ある夏の夜のこと。山城国、西の京に住む宅兵衛という者が、近くの寺でうたた寝をしてると「宅兵衛、宅兵衛」と呼ぶ声がする。驚いて目を覚ますと驚に似て色黒く、目が灯火のように光り、羽を羽ばたかせ、鳴く声が人のような化鳥がいた。このことを聞いた長老は「最近、寺に死人が運び込まれたのが原因だろう。新しい死体の気を変じて陰魔羅鬼というものになると経典に書かれている」と語ったという。



▲カラスや黒鷲には死のイメージがあるのかもしれない。